



Title	「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」の展開
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	忍頂寺文庫・小野文庫の研究2. 2007, p. 5-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47715
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」の展開

飯倉 洋一

二〇〇六年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」の研究成果報告書『忍頂寺文庫・小野文庫の研究2』を刊行するはこびとなった。前年度の報告書は幸いにも、各方面からさまざまな反応があり、多くのご教示に与った。この場を借りて感謝申し上げる。忍頂寺務翁のご子孫である忍頂寺晃嗣氏(故小野麗子氏ご令息、仙台在住)にも報告書を送りすることができ(この件については内田宗一氏のご協力を得た)、よろこんでいただいたことも、代表者として嬉しいことであつた。研究の成果をもとにして、二〇〇六年四月三十日・五月一日の両日、大阪大学の「いちよう祭」の一環として、大阪大学附属図書館において団十郎関係書を中心とする忍頂寺文庫・小野文庫の展示も行われた。前号拙稿「忍頂寺文庫・小野文庫の研究について」にも記したように、この研究は二〇〇五年度、人間文化研究機構国文学研究資料館の伊井春樹館長のご提案を契機に、文学研究科の競争的資金である共同研究に応募して採択されることで始まった(それまでも共同研究のための資金獲得の努力はしてきたが実らなかったことは前号拙稿に記した通りである)。本研究はそれを継承し展開するものであるが、二〇〇六年三月十七日に、阪大と国文研との間で結ばれた研究連携に関する協定書と覚書に則つて、本年度は文学研究科と国文研との研究連携事業として行われることになった。協定書には「趣旨」として両機関が①共同研究の実施、②講義・講演およびシンポジウムの実施、③学術情報及び資料の交換、④その他必要な調査及び研究を行うことが謳われ、「覚書」には、「忍頂寺文庫・小野文庫の文献資料等について、目録解題の作成を含む共同研究を行う」ことが明記されている。これにより本年度から国文学研究資料館所属の六名の研究者が共同研究に参加することになった。また本報告書の編者が代表者名ではなく、(忍頂寺文庫・小野文庫の研究)共同研究グループ・国文学研究資料館」となった。文学研究科への報告書という性格が一方ではあるために、共編

名に文学研究科の名を挙げることは避けた。

本年度の文学研究科共同研究経費申請書の「研究目的・計画」には以下のように記した。

大阪大学文学研究科は、「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」を国文学研究資料館（伊井春樹館長）と研究連携を数年次にわたり、本格的に行うことになった（別紙協定書）。研究連携は共同出資であるため、文学研究科側の負担を共同研究経費で拠出していただくためにここに申請することとする（国文研側の旅費・人件費は国文研が負担する）。忍頂寺文庫・小野文庫（大阪大学附属図書館所蔵・日本文学研究室保管）は、近世歌謡研究家忍頂寺務（1886～1951）氏旧蔵の、近世歌謡関係（および近世芸能関係）コレクションとして有数のものである（1954年・2000年受入）。これらを調査研究し、その目録解題を刊行し、文献を用いた研究成果を明らかにすることが最終的な目的である。このプロジェクトは昨年度より行われており（報告書参照）、本年度は、次のような計画で臨む。

- 1 データ採取を含む文庫所蔵文献の書誌学的・文献学的研究
- 2 忍頂寺務宛書簡・および務の稿本を中心とする忍頂寺学の研究
- 3 文庫所蔵の洒落本の国語学的研究
- 4 貴重文献の紹介・翻刻。

1～4の研究の遂行のために、8月に研究打ち合わせを、1月に公開研究会を行い、3月に研究成果報告書を刊行する。
「研究の意義・予想される成果」については次のように記した。

この研究連携は、研究機関と大学が互いに持つ利点を生かして連携し、一層の研究効果があがると期待されるものである。たとえば、国文学研究資料館は蓄積されたデータベースや資料収集スタッフ・技術を提供することができ、大阪大学は現在資料を管理所蔵し、調査研究を積み重ねてきているという実績があり、双方が協力することで、より効率的に調査研究を推進できる。

忍頂寺文庫・小野文庫の書誌学的・文献学的研究が行われ、公開されることは現在同文庫に多数の閲覧複写申し込みが寄せられる現状から考えても大きな意義を有する。同文庫には歌謡・洒落本以外にも、近世小説・俳書・狂歌・吉原細見・役者評判記があり、これらの蔵書としての性格を見極めていく研究も意味がある。本研究が近世芸能・近世文学さらには近世語研究に有益な成果をもたらす

ことが予想され、社会的貢献も少なくなってしまう。すでに昨年度の報告書は好評を得ており、「国文学」平成18年6月号の「学界時評（近世）」においても取り上げられているという実績がある。

本年度の成果として特記すべきは、まず、小野文庫の和古書のデジタル撮影がほぼ終了したことである。これは国文研側の経費で行われ、昨年度来、撮影の立会いに当たられた井田太郎氏の多大なご尽力を得た。

次に小野文庫の忍頂寺務苑書簡の調査研究（内田宗一氏）と文庫悉皆調査に基づく蔵書印の研究（青田寿美氏）に本格的に着手したことである。国語学が専門の内田氏は、かつて阪大の助手を勤められ、小野文庫受け入れの窓口になられた方であり、書簡の整理にも当たられている。小野文庫について知悉している内田氏に本年度から参加いただくことになったのは、本研究にとって非常に大きいと言わねばならない。内田氏をご紹介くださった福田安典氏にも感謝申し上げる。書簡調査は緒にいたばかりだが、早くも忍頂寺学の形成において興味深い事実が次々に明らかになっている（本報告書参照）。また近代文学が専攻の青田氏は現在国文研の助教授だが阪大日本文学研究室のOBでもある。かつて忍頂寺文庫の蔵書印の調査を経験されており、今年度から悉皆調査をお願いしている。調査の成果は来年度あたりからご報告いただけると思う。書簡および蔵書印調査は、来年度以降に継続する。

個別調査としては、天下の孤本である三代目団十郎追善の俳書『八日目華』と珍書『開帳おどけ 仮手本忠臣蔵』の研究がある。『八日目華』は美しい装丁の俳書であるが、その全貌が今回カラー図版で示された。そして井田氏により美術史的観点からの考察が、尾崎千佳・辻村尚子両氏により翻字と俳書としての分析がなされたことの意義は大きい。また珍書である『開帳おどけ 仮手本忠臣蔵』は正木ゆみ・川端咲子両氏により、詳細な調査考究がなされ、芸能史的にも戯作史的にも貴重な文献であることが証された。竹村明日香氏は忍頂寺文庫の特色のひとつである兵庫口説類を調査した。いずれも本報告書にその成果が公表される。

洒落本については、ほぼ全点が大阪大学総合芸術博物館統合資料データベースのコンテンツとして公開されている（大阪大学総合芸術博物館のホームページは<https://www.museum.osaka-u.ac.jp>）が、この豊富な洒落本コレクションを活用して、洒落本のテキストデータを入力し、国語学的に分析しようとする研究も前年度に引き続き依田恵美氏らによって進められた。

また山本和明氏からは仮名垣魯文作の八代目団十郎追善書が忍頂寺文庫に存在することをご教示いただき、前号紹介の団十郎関係書解題

を補うばかりか、貴重なご論考をご寄稿いただくことになったのは実にありがたかった。山本氏と青田氏がともに国文研の仮名垣魯文プロジェクトに参加されていたことがご縁になった。

二〇〇七年一月十四日には大阪大学文学部第一会議室において公開研究会を実施した。発表内容は以下の通りである。

- 1 忍頂寺文庫所蔵兵庫口説について―橋づくし、お染久松ものを中心に―
大阪大学大学院 竹村明日香
- 2 小野文庫蔵忍頂寺務宛て書簡をめぐって
東京家政学院大学 内田 宗一
- 3 享保俳諧のなかの団十郎俳書―忍頂寺文庫蔵本を中心とした多角的アプローチ―
国文学研究資料館 井田 太郎
山口大学 尾崎 千佳
大阪大学大学院 辻村 尚子
神戸女子大学（非） 川端 咲子
- 4 忍頂寺文庫蔵『開帳おどけ 仮手本忠臣蔵』考
京都女子大学短期大学部 正木 ゆみ

当日は午前九時三十分開始にも関わらず、昨年度を上回る四十数名の参加を得た。演劇研究者・近世文学研究者が多数参加し、きわめて活発な議論・情報交換が行われた。それらは本報告書所収の各論文に反映されている。

本報告書は、この研究会での発表を基盤とした論文・解題・翻刻および前号の補遺的報告（飯倉・簗田の翻刻など）で構成される。団十郎関係書特集の様相は前号から引き継いでいるが、新しい展開も見られる。忍頂寺文庫・小野文庫には、まだまだ多くの貴重な資料が埋もれているだろう。目録の完成を目指す一方で、調査を行い、後続の報告書において発表してゆきたい。読者諸賢には、ご批評・ご教示を賜ることをお願いしたい。

昨年度同様、研究推進室の西田有利子さんにはなにくれとお世話になった。深謝申し上げます。

（二〇〇七年三月記）